

歴史探訪

「そのぎごおり彼杵郡」の地名の起源

長崎県の大村湾。海を挟んで東西の岸は、それぞれ東彼杵と西彼杵と呼ばれています。他地域の人にとって「彼杵」は、難読地名のひとつかもしれません。長崎県下においても、改めて「彼杵」とはどういう意味かと問われると、多くの人が首をひねります。「彼杵」という地名は、何に由来するものなのでしょうか。

「そのぎ」にまつわる伝説

「彼杵そのぎ」の起源には諸説あり、未だ定説はありません。

奈良時代に編纂されたといわれる地誌『肥前風土記』には、景行天皇が土蜘蛛つちぐもと呼ばれる現地の豪族から得た玉を賞して、この地を玉の備わった国「具足玉国そないたまのくに」と命名したとの故事が記されています。

さらに、現在の菅無田地区に生えていたという樹齢数千年の大きなクスノキの存在から、「その木」と呼ばれるようになったという話、そしてもうひとつ、空から杵きねが降ってきたという不思議で興味深い伝説も残っています。

杵きねが降る不思議にまつわる物語と、それに関連して後世に伝わる伝像について、東彼杵町史談会所属の磯木元司氏が研究の成果をまとめた文章を紹介します。

天空から降ってきた杵

昔、東彼杵郡は西彼杵郡とともに、たんに「彼杵郡」と呼称されていました。

その郡名の起源について、以下のような話が伝わっています。

当時、その一帯にはまだ人家も少なく、あちらに一軒こちらに一軒とあるほど

で、田畑らしい土地も拓けず、人々は自然を友として暮らしていました。草の根を掘って自然薯を探したり、果実を採集したり、海で魚や貝を採ったり……豊かな自然に恵まれて、食糧の貯蔵も大して気に留めず、その日暮らしをするような生活を送っていたのです。野原の草花同様に、空の雲は彼らにとって親しい友たちでした。

ある晴れわたった春の日のこと、とつぜん天空の彼方に紫雲がわきあがり、現在の大村湾の上空に広がりはじめました。神秘の雲は、まるで生きているかのように動き回っています。

「不思議だ、おかしい雲だ」

皆が空を見上げ驚きの声をあげたそのとき、紫の雲から、例えようもないほど美しい琴の音色が響いてきたのです。驚いた人びとは、原生林や水辺の岩陰に逃げこみ、身を隠しました。そして恐る恐る、妙なる調べを奏でる空を仰ぎ見ると、紫雲の下は光り輝き、金の粉、銀の粉が降り注ぐようにキラキラと輝いていました。

やがて、次の不思議が起こりました。雲の中から何かが降ってきたのです。それは大小いくつもの杵きねでした。人々

ほどなく杵は降り止みましたが、空にはまだ神秘の紫雲がたなびいたままでした。

「これは大変なことになった」

村長は、急いで他の部落の村長たちへ使いを走らせました。皆同様に驚き恐れていた時でしたので、すぐに自分の部落の物知りたちを引き連れて集まりました。ところが、起こった不思議について説明できる者はおらず、対処の策もなく黙り込むばかりありません。

どうすることもできないままに七日七夜が過ぎ、朝日が昇ると、空の異変もようやく静まったのでした。空はつね日ごろの表情を取り戻し、ほっと胸をなでおろした人の周りに穏やかな春風が吹き抜けていきました。

自分の部落に帰った村長たちがそれぞれの地域を調べてみると、大きなもの二個と小さなもの四十六個、合わせて四十八個の杵が天空から降りくだったことが判明しました。大きな杵のひとつは彼杵（東彼杵）の地に、もうひとつは宮村（昭和三十三年佐世保市に編入）に落ち、小さな杵四十六個は現在の東彼杵郡と西彼杵郡一帯の各所に落ちたのでした。

伝説の杵で作られた仏像

時は流れて永正五年（一五〇八）戊辰七月下旬、彼杵村の大安寺住職・令玄が宮村能登守通定に「本尊仏を作ってください」と願い出ました。承知した通定が仏像の材料となる木を探させたところ、彼杵村の宝杵山妙音寺に二個保管されている、琴の音とともに天から降ったという伝説の大きな杵のことを聞きつけたのです。通定は、妙音寺住職・有池叟に頼んで杵から二体の阿弥陀如来の坐像を作らせ、そのうちの一体を彼杵の大安寺に、そしてもう一体は宮村の長畑に建立した正泉寺に安置しました。

その後の永正十年（一五一一）、通定の家臣が反乱を起こし、通定は嬉野の不動山二不川へと追われるという事件が起こりました。その際に正泉寺は焼け、阿弥陀如来坐像は萩坂（現・佐世保市萩坂町）の釈迦寺に移されています。大村家十八代当主であり、初の切支丹（キリシタン）大名としても有名な大村純忠は、直ちに家臣の大村純次を宮村に遣わし騒ぎを平定させ、そのまま宮村の地頭となりました。

やがて宮村が安定を取り戻すと、村人たちは村の中央に禅宗の崇聖寺を建立し、釈迦寺の阿弥陀如来坐像を改めて本尊として迎え、安置したのでした。

切支丹による仏教弾圧

当時、この地方一帯では、大村純忠がキリスト教宣教師や信者たちを手厚く保護していました。その結果、信者達は虎の威を借る狐のごとくに勢力を増し、各地で既存の神社や寺を焼き払っていきました。阿弥陀如来坐像の置かれていた彼杵の大安寺は、そのころに焼失したものと考えられます。

宮村の寺社も天正二年（一五七四）に焼きうちにあいますが、岡尾張という武将が燃えさかる崇聖寺に飛び込むと、大阿弥陀如来坐像を背負って運び出し、焼失の難を逃れることができました。そして早岐広田（現・佐世保市早岐町）の浦川内の山中に小さな祠を作り、仏像を隠しました。

天正十五年（一五八七）、島津征伐のために九州にくだった豊臣秀吉は、大村純忠と切支丹との密接な関係を知ることとなりました。神国日本の神社仏閣を焼き払う切支丹の非道を、純忠が黙認しているという事実が秀吉は激怒し、大村家を取り潰すまで考えます。しかし、純忠の息子・喜前の秀吉に対する忠誠心と、のちの熊本藩主・加藤清正の取りなしにより、本領安堵となったのでした。

大村藩初代藩主となった喜前は、切支丹信仰は藩の存続を危うくすると考え、切支丹寺院を焼き、切支丹信仰を禁止しました。慶長七年（一六〇二）、大村藩から切支丹宗徒の



彼杵神社神紋「八角二ニツ手杵」



大村湾を囲むように広がっていた大村藩の領地

現代に息づく「伝説」

影は消え、藩としての信仰は加藤清正の勧めもあって日蓮宗として、大村家菩提寺としての本経寺が建立されました。さらに、切支丹宗徒によって焼かれた寺社も再建されていきました。

太古の昔、天空から降りてきた大杵で作られた阿弥陀如来坐像は、現在、佐世保市城間町の崇聖山正蓮寺に寺宝として安置されています。

大阿弥陀如来の腹腔底部の台座には以下のように記されています。

「午時、慶応元年（一八六五）霜月今改彩色。当代士 代住、法音代舎第法城数年之宿願望奉如来厨子並内陣奉彩色之。世話方萩坂莊助。仏師、生国島原、川棚住人、林田新平。午傳啓蔵。」

◎阿弥陀如来背内銘写。「午時、永正五戊辰七月下旬、肥前国彼杵村、宝杵山妙音寺住山作者有池叟、大檀那、宮村能登守通定。大願主、大安住山令玄首坐」 右観経中下生之尊像也、此人命 終時遇善知識為其広説阿弥陀仏、国土樂事亦説法蔵比丘四十八願聞此事已尋即命終譬如 土屈伸項即生西方極樂世界。◎応知。先年寛政九（一七九七）

巳七月十六日、法順代有彩色処損。大村丹後守代寺社奉行渡辺雄太夫。横目野田新七。氏子、世話方頭取、山道恒左工門。同姓嘉平」



◀正蓮寺に伝わる秘仏・阿弥陀如来坐像

大村藩四十八ヶ村と「杵」

『大村郷村記』によると、大村藩領は四十八ヶ村だったとされています。

三浦、上鈴田、下鈴田、茅瀬、原口、武松、黒丸、皆同、今富、福重、松原、江串、千綿、彼杵、西川棚、東川棚、上波佐見、下波佐見、宮村、杵岐力、長与、時津、浦上、福田、式見、畝刈、三重、神浦、雪浦、瀬戸、大和田、多良、面高、横瀬、川内浦、小迎、八木原、下岳、亀の浦、平原、尾戸、長浦、村松、西海、形上、戸根、日並、大村

この四十八という数は、真言宗の経文の四十八願になぞらえたものとされますが、また別に、大村湾を包囲する地域を、琴の音とともに降ってきた杵の数の四十八に分けたものとする説もあります。それら四十八個の杵「ソノキネ」が、時間の経過とともに「ソノキ」となったということです。東彼杵町には「音琴」という地名があるのも興味深いところでは。

いずれの由来話も、現時点で証明することは困難で、おそらく後世になってもそれは変わらないでしょう。ロマンあふれる郷土の伝説として、受け継がれていくことを願っています。

東彼杵町史談会 磯木元司

※参考文献 中島雄俊著『佐世保市宮地区歴史散歩』